



加藤 智亮 さん

青年海外協力隊

【測量】

【派遣国】
タンザニア

【派遣期間】
2012年6月～2014年6月

急激に都市化が進み、土地取引が活発化するタンザニアで、ますます需要が高まる地図のデータ化を実現する。

日本で培ってきた専門性を生かし、派遣先のタンザニアに測量士として赴任した加藤智亮さん。当時、都市化が進み土地取引が活発化していたタンザニアでは、無計画な都市開発を防ぐための正確な地図情報が必要とされていました。しかし、現地で保管されていたのは、数十年前の航空写真や手書きの地図だけ。そこで、加藤さんが取り組んだのが、地図情報のデータ化でした。果たして加藤さんはどのように活動を展開したのでしょうか？そしてその先に待っていたものは？帰国後は工務店を起業した加藤さんにお話を伺いました。

応募のきっかけ

「海外 測量」で検索！
一番上に出てきた青年海外協力隊に応募。

民間の企業で測量の仕事しながら、一度は「海外で働いてみたい」と思っていた私。自分が持つ測量の技術が海外でどこまで通用するのか、とても興味がありました。そんなある日、インターネットで何気なく「海外 測量」というキーワードで検索したところ、一番上に表示されたのがJICAの青年海外協力隊。以前は全く知りませんでした。自分の専門性を生かして海外の人のためにもなる仕事ができることに惹かれて応募しました。



▼ 地図作り

▲ 現地の子供たちと

派遣前訓練

苦手な英語に悪戦苦闘！
人生で一番机に向かった2ヶ月間？！

昔から勉強が大の苦手で、ずっと逃げ続けてきた英語と真剣に向き合わなければならない状況に追い込まれました。訓練中に習熟度を測る試験も受けましたが、結果は目を覆いたくなるような悲惨な状態。見かねた同期隊員たちの励まし（というよりも敷）を受けて、死ぬ気で勉強しました。おそらく、派遣前訓練が、私の人生で一番勉強した2ヶ月間だったかもしれません。

派遣中

紙ベースでしか存在しなかった地図情報をデータ化することで、
県庁の業務効率もアップし住民へのサービスも充実。

私が配属されたのはタンザニア・バガモヨ県庁の土地環境課。この課は、バガモヨ県の土地開発に必要な測量データの収集・管理と、土地の登記や地積測量図の管理という2つの役割を担っていました。さらに、住民から申請があった場合には、地図のコピーを無料発行するというサービスも土地環境課の仕事でした。当時タンザニアでは、投資目的を主とした土地取引が非常に活発に行われており、土地の管理に必要な不可欠な地図の需要は高まりつつありました。にもかかわらず、私が赴任したとき目にしたのは、地図とは名ばかりの航空写真と手描きの観光マップのみ、地図コピーの無料発行サービスも、発行にかかる費用や手続が原因で、ほぼ機能していませんでした。

そこで私が苦手したのは、地図情報の集約とデータ化でした。具体的には、基盤となるバガモヨ県全体地図のデジタルデータに、地理情報システム（GIS）というソフトウェアを使って、登記情報や地積測量図の情報などを追記し、デジタルデータの形式に必要な情報を集約していくという作業でした。

この作業を始めるにあたり最初に障害となったのは、基盤となる全体地図のデジタルデータが存在しなかったこと。そこで、首都ダルエスサラームにある、日本でいう国土交通省にあたる機関に出向き、全体地図として使える航空写真のデジタルデータの提供を依頼しました。当初は「怪しい外国人が来た！」と思われたのか、提供を断られました。あきらめず上司のレターを持って再度依頼。スワヒリ語を使って、依頼の趣旨を懸命に説明してなんとかデータをもらうことができました。

地図情報のデータ化が完成し、1つの地図のなかに登記や地積測量図の情報が集約されたことで、県庁の仕事の効率がアップ。さらに地図をほしいという人には、無料ではなく有料で発行することで、コピーのトナーや用紙代などを回収できるようになりました。これにより、これまで滞りがちだった地図の発行がスムーズにストレスなく行えるようになり、同僚からも喜ばれました。そして、私の活動を知った首都であるダルエスサラームの機関から、ほとんど進んでいなかった地図のデータ化への協力依頼が、私が何度か首都に足を運び、データ化の支援を行いました。

地図のデータ化を進める傍ら、私はもともとあった古い観光マップの更新も行いました。グーグルマップや自分の足を使って、現状を確認しながら、道や店舗を最新情報に更新。完成後、その地図は、町中に掲示され、市民や観光客に活用されています。



▲ 空手の指導風景

帰国後（現在）

「物を大切にするという考え」を
日本に伝えていけるような職人になりたい。

タンザニアでは、電気や水道の簡単な工事やパソコンの修理など、身の回りのことは基本的に何でも自分でやっていました。日本では、修理などは専門家に依頼したり、物が壊れれば新しいもので代用してしましますが、タンザニアでの生活で、たいていのことは自分でできるということに気づきました。一つの物に愛着を持ち、少しずつ手を加え、大切に使うことで、その役割を長く果たしてくれるのだという考え方にたどり着いたのです。

こうした経験や、タンザニアのコミュニティの中で地域に根付いて暮らすことの大切さを学んだことから、帰国後は大工職人になり、思い切って起業。リフォームや店舗改装の中でリサイクルを行う工務店を立ち上げました。

タンザニアの同僚とも連絡を取り合っている。仕事もタンザニアとの関わりも、自分のペースで続けていきたいと思っています。



加藤さんへの3つの質問

Q1. 活動以外の時間はどのように過ごしていましたか？

実は日本でプロの格闘家として現在も活動しており、空手を熱心に続けている私は、タンザニアでも仕事以外の時間は主に空手の練習に費やしました。空手を通じて現地の人との交流を深めることもできたので、続けて本当に良かったと思います。また、教えたことをすぐに覚えてしまう、現地の人々の身体能力の高さにはとても驚かされました。

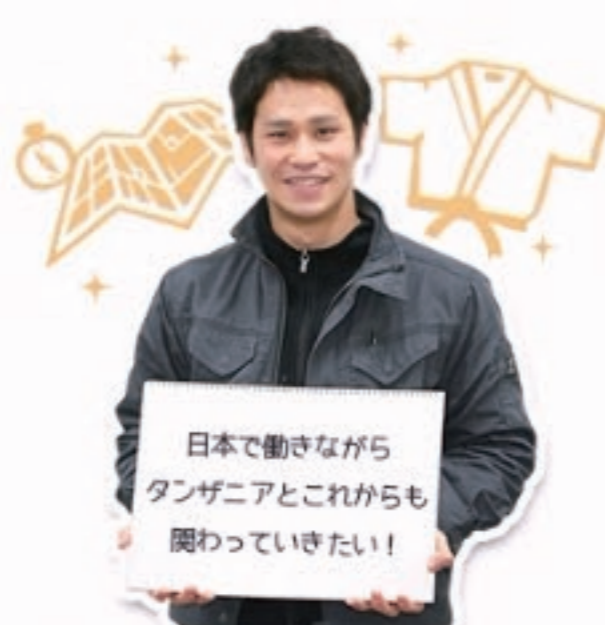
いつも稽古を一緒に行っていたのは、現地で東洋人を見つけては「空手を知ってるか？」と声をかけていた友人。寸止め空手の経験者でした。私は仕事が終わると、彼と一緒に走ったり、筋トレをしたり、空手の基本や型の指導を行っていました。彼とは空手という日本の武道を通じて、深い友情を築くことができました。

Q2. 現地でできた友人との思い出は？

殺物の粉を練ってつくるアフリカの伝統食「ウガリ」はよく食べました。そんな「ウガリ」で最も印象に残っているのは、前出の友人の就職祝いでの食卓です。奥さんと子供を置いて、別の町へと単身赴任する友人の出発前夜、彼の自宅に呼ばれ、月明かりの下、一緒に囲んだ「ウガリ」の上には、お祝いの意味を込めた揚げ魚が一匹のっていました。その大切なお祝いの魚を、友人は私にくれたのです。友人との別れを惜しみながら、素手で食べた揚げ魚と「ウガリ」の味は今も忘れられません。

Q3. 現地の文化や習慣に学んだことは？

タンザニアの人々は、挨拶や礼儀をととても大切にします。たとえ急いでいても、挨拶をしないや突然話しかけると怒られることも。ある日道を聞こうと近くにおじさんにいきなり話しかけたら、「まず挨拶をしろ」と注意されました。また、現地独特の文化には学ぶことが多かった。真しくて食べものも満足にない子どもさえ、客人がくるとカリブ（よろこぼ）と言って、食べていたトウモロコシを半分も分けてくれます。その純粋で無垢な優しさに、思わず自分の行動を省みずにはいられませんでした。



日本で働きながら
タンザニアとこれからも
関わってみたい！

JICAボランティアで得たもの

さまざまな人との出会い。

派遣前訓練と一緒に学んだ、職業も年齢も異なるたくさんの同期のボランティア仲間たち、そして現地で深い友情を築いた友人との出会い。さらに、現地の職場の同僚や町の人々との出会い。これら一つひとつの出会いから、多くのことを学びました。私が日本で工務店を始めるきっかけとなった、「修理して物を使いづける」という考え方を教えてくれたのもタンザニア人の同僚たちでした。JICAボランティアに参加することなく、日本で同じ仕事を続け、同じ毎日を繰り返していたら、きっと得られなかった貴重な出会いだったと帰国後の今になって改めて実感します。

これからJICAボランティアを目指すみなさんへのメッセージ

貴重な2年間を、どこでどのように過ごすかで、人生はがらりと変わる！

2年間、日本に留まることで得られるものも数多くあるでしょう。しかし、日本では決して得ることができない経験が協力隊にあることも事実です。そのどちらをとるか、みなさんにはじっくり考えてから応募してほしいと思います。当時、空手の選手として活動していた私の場合、日本を離れることで選手としては成長できなくなるのではないかと不安を抱えていました。しかし、ひとたび現地に赴いてみると、空手の練習もできました。空手を通じて現地で大切な友人もできました。人生はどこでどのような展開が待っているかわかりません。2年間の協力隊経験は、きっとあなたの人生を豊かにしてくれると思います！